

希望の巡礼者として通常聖年（2025）から 『シノドス最終文書』が示す教会総会（2028）に 向けての新たな歩みについて

広島司教区 アレキシオ 白浜満司教



8月5日 平和行事 平和祈願ミサの様子

はじめに
広島教区の兄弟姉妹の皆様、10月に入って秋の気配が感じられるようになりましたが、その後、お変わりなくお過ごしでしょうか。世界の教会は、教皇レオ14世のもとで、2028年に開催される「教会総会」に向けて、新たな歩みをスタートしています。このことについて、一緒に考えて行く前に、まず、今夏の行事等への感謝を申し上げます。



感謝のことば

今夏、米韓日の枢機卿様、大司教様、司教様方や平和巡礼団、そして、教区内外から多くの方々をお迎えして、被爆・終戦80年の平和祈願ミサや諸行事等を実施し、無事に終えることができました。平和実行委員会の委員をはじめ、ご協力くださったすべての方々に、心より感謝申し上げます。とくに被爆80年にあたり、教皇レオ14世から、広島と長崎の被爆者と教会に向けたメッセージをいただきました。世界の平和のために祈り、特別な配慮を示してくださいました教皇様に感謝したいと思います。被爆者が高齢化していく中で、これからも神様の恵みによって支えていただきながら、被爆地の教区として、キリストの平和の使徒とし

カトリック

広島教区報

No. 142

カトリック
広島司教区

発行責任者
広報担当
瀧井英昭神父

「点訳版」あります。
お問い合わせください。

広島市中区鞆町 4-42
広島司教区内
TEL (082) 221-6017

That's why,
you know.
じゃけえのう

6月からサンタフェ大司教区で協力司祭として過ごさせていただいております。目的は「核兵器のない世界のためのパートナーシップ」の推進です。アメリカに到着して次の日、たまたま司教座聖堂の近くの交差点で核兵器廃絶を訴えている団体と出会いました。毎週金曜日に行われ、何十年も参加している人もいと聞き、大変勇気づけられました。一方厳しい現実もあり、私の住んでいるグアダルーペの聖母教会から車で40分の原子爆弾の誕生の地、ロスアラモス研究所近くの博物館は「原爆投下は戦争終結を早めアメリカ国民の命を救った」という展示内容で、広島、長崎の写真は破壊された建物だけで犠牲者の方々の事が全く言及されていませんでした。現地の人々は核軍拡の問題への関心が薄い印象です。どうか私の活動が「からし種のたとえ」のように、微々たる働きでもいつか平和の実を結びますように。

「あなたの業を主にゆだねれば、計らうことは固く立つ」(箴言 16:3)

伊藤 正広



“That's why, you know.”とは
日本語で「だからね」
広島弁では、おなじみ
「じゃけえのう」という意味。

司教メッセージ・じゃけえのう・平和行事報告
うちのイチ押し・ベトナム人協団体
エリザベト音大イタリア・ドイツ公演報告
サビエルフェスタ・オリブの樹
地区便り・海峡からの風
青少年・ひと粒

12面
10面
8面
7面
6面
1面

での召命を生きるために、ともに祈り、地道に小さな努力を重ねて行きたいと思っています。

また、今年の「広島教区の日」（9月15日）を前に、待望の「広島教区百年史」が発刊されました。本当に素晴らしい百年史が完成しました。教区百年史編纂委員会の委員をはじめ、準備段階でご協力くださった関係者の皆様に、御礼申し上げます。記念誌というより、歴史書としての内容を持つ本書が、教区の信仰の先達の歩みを学び、これからの新たな歴史を築いて行く力となりますように。

「希望の巡礼者」というテーマで過ごしてきた2025年の通常聖年も2か月足らずとなり、12月28日に閉幕します。被爆80年にあたっていた通常聖年の間に、希望をもって歩み続けることの大切さをわたしたちに思い起させ、数多くの恵みを与えてくださった神様に深い感謝をささげたいと思います。

新たな「実施のステージ」に向けて

教皇フランシスコが「シノドス流の教会——交わり、参加、宣教」をテーマに2021年から3年間に神の民全体からの段階的な聞き取りを踏まえて実施した世界代表司教会議（世界シノドス）第16回通常総会の第2会期が2024年10月26日に閉会しました。そして教皇フランシスコは、その終わりに提出された『シノドス最終文書』そのものを、承認され、その中に示されている方向性を参照しながら、新たな歩みを始めることを願われました。そして、教皇庁シノドス事務局は、教皇レオ14世の承認のもとに、「シノドス 実施ステージの旅程2025年—2028年」（シノドス流の教会 交わり、参加、宣教）という文書を、今年6月29日（聖ペトロ聖パウロ使徒の祭日）に公布しました。この文書に基づいて、世界シノドスのこれまでと、これからの歩みを整理すると、以下の

ようになります。

① 神の民への意見聴取と聞き取りのステージ（2021年—2023年の間に実施）

② 世界代表司教会議（シノドス）総会の2回の会期（2023年10月と2024年10月）に及ぶ『シノドス最終文書』のまとめのステージ

③ 『シノドス最終文書』に基づいて、「教会の生活をよりシノドス的なものとする、新しい組織や実践を検討することを目指す」ステージ

すでに、①と②のステージは終了し、この貴重な体験の実りとしてまとめられた『シノドス最終文書』が、「ペトロの後継者の通常の教導職によるもの」として教皇フランシスコによって、2024年11月24日（王であるキリストの祭日）に公布され、全教会に手渡されました。「この文書は、聞き取りと識別によって、数年かけて熟した

ものの報告であり、教会の生活と使命のための権威ある方向づけとなるものです」（教皇フランシスコの付記）。

そして、「地方教会（↓教区）とその連合体（↓司教協議会）は、種々の法や本文書が定める識別と意思決定のプロセスを通して、本文書に示されている権威ある指示を、おのおのの文脈に応じて実現していくよう求めました（同付記）。

今後、広島教区においても希望の巡礼者として、上記③の『シノドス最終文書』に基づく新たな歩みを開始して行くことが求められています。この旅程は、以下のようになっています。

【実施ステージの旅程】（概要）

2025年6月—

2026年12月……

各教区における実施のための活動

2027年上半年……

教区における評価集会

2027年下半年……

各司教協議会における評価集会

2028年第1四半期……

大陸別評価集会

2028年10月……

バチカンでの「教会総会」

①【実施ステージの目的】

この3年に及ぶ「実施ステージ」は、福音宣教の使命をより効果的に遂行していくことができるよう、

『シノドス最終文書』の中に含まれている「教会生活における特定の具体的な側面に焦点を当て、その刷新のための提案」（おもに『シノドス最終文書』第2部、第3部、第4部）について検討することを求めています。そしてその前に、

教区における新しい組織や実践を検討し、具体的に確立することを求めています。「実施ステージ」は、

まず「教会生活やその組織・機構の役割に」目に見える形での成果を求めています。シノドス流の組織や実践が生まれなければ、個々の課題についての検討に入ることは困難だからです。

②【実施ステージに参加する人】

ペトロの後継者としての

教導権によって、教皇フランシスコは、前例のない行為として『シノドス最終文書』を承認し、その方向性に基づいて、神の民全体がともに歩むよう求めました。そのために、実施ステージには、『シノドス最終文書』の受け手である神の民全体（女性も男性も、幅広い範囲のカリスマ、召命、奉仕職を有する人々が含む）が参加するよう招かれ、これまで周縁部に取り残された人々が、誰も排除されないようにすること求めています。

「教区司教の責任」

(2-1)

各教区における実施ステージの第一の責任者は教区司教とされています。つまり、「この歩みを始め、その期間、方法、目標を公に示し、その進捗に寄り添い、その結果を承認して終了させるのは、教区の司教です」。この指摘に従って、わたし自身も、広島教区における実施ステージの期間（開始日と終了日）、そのあり方（ツールや方法）、目標等についての原

案を準備し、11月8日に予定されている平和の使徒推進本部会議で検討をしていただいた上で、12月13日に予定されている教区宣教司牧評議会に提出して意見を求め、最終決定をして、それを皆様に公表したいと思っています。

「司祭と助祭」 (2-1a)

職務の遂行において、司教と共同責任を負っている司祭と助祭には、神の民の中にあるさまざまなカリスマの識別と、教区に対する実施ステージの歩みの同伴と導きにおいて、司教の協力者としての役割が求められています。そのために、まず司祭団の中で、『シノドス最終文書』や『シノドス 実施ステージの旅程 2025年—2028年』の文書の理解を深めて行く必要があります。

「教区レベルの参与機関」

(2-1b)

教区の司祭評議会、宣教司牧評議会、経済問題評議会は、従来のようにそれぞれに独自の方法で教会的な識別のプロセスに参加します。また、シノドスの実施

ステージの歩みに関わる司教の提案について意見を述べ、その意思決定に参加する役割を行うことになりました。

「シノドス・チーム」

(2-1c, 2-2)

この実施ステージのために求められているのが、教区レベルでの「シノドス・チーム」の設置です。これは可能であれば、地区および小教区レベルでもこのチームを設置することが望ましいとされています。またこのチームは、種々の年代、文化（国籍）、養成の背景を持ち、教会の多様な奉仕職とカリスマを代表する男女の信徒、司祭、助祭、男女修道者・奉献生活者によって構成されることが求められています。また、司教がこのチームの一員になることにも何の妨げもなく、むしろ望ましいとされています。そして、このシノドス・チームは、今後の教区のシノドス流のあり方の活性化や、そのために必要な養成の役割を担うことが求められています。広島教区においては、すで

に設置されている平和の使徒推進本部が、このシノドス・チームの役割を果たしているように思います。

「実施のステージ」の歩み

今後、広島教区においては「2020教区シノドス（代表者会議）」の提言をまとめた「司教教書」ともに歩むあたたかさのある教会をめざそう」（2022年復活祭）で示されスタートしたばかりの歩みを、世界『シノドス最終文書』（2024年11月）に照らして振り返り、さらに「実施ステージ」の歩みを組み入れて行くことが求められています。

① 「シノドス対応調整チーム」

「司教教書」（2022年の復活祭）のパンフレットの7頁に、「提言推進のための教区組織」という項目があり、その1番で「シノドス対応調整チーム」という名称のチームの設置が提言されていました。実際に、このチームは「平和の使徒推進本部」の傘下に位

置つけられ、自発的なチームとして活動を開始し、月に1回の割合でオンライン会議を開催しています。そして、おもに「司教教書」の中に要約された「10のテーマ30のチャレンジ」の中で優先的な課題を整理し、その具体化（実現）に向けての作業を続けてきました。この度の『シノドス最終文書』（2024年11月24日公布）が求めているシノドス・チームの役割を、広島教区においては、平和の使徒推進本部が荷いその下部にある「シノドス対応調整チーム」が下準備をする体制がベストであるように思います。今後、平和の使徒推進本部会議や教区宣教司牧評議会での話し合いを踏まえて、『シノドス最終文書』を参照しながら、教区の組織体制をして行く検討が必要になります。

「シノドス 実施ステージの旅程 2025年—2028年」の文書の中で、「シノドス・チームの権限は、（司教による意思決定のための）参与機関

(教区の司祭評議会、宣教司牧評議会、経済問題評議会など)の権限と重複するものではなく、相乗効果を追求する精神のもと、それと調整されます。シノドス・チームは、その教区におけるシノドス流の活性化や養成に役立つよう設置されます。参与機関は、教会法によって規定された、能動的に評議していく任務を実行していくよう求められています」と指摘されています。

広島教区においては、(司教による意思決定のための)参与機関(教区の司祭評議会、宣教司牧評議会、経済問題評議会など)と、次に述べる「宣教ひろば」の役割と関連性を整理することによって、その相乗効果を期待できるのではないのでしょうか。

②「宣教ひろば」の活用
同じく「司教教書」(2022年復活祭)のパンフレットの7頁の「提言推進のための教区組織」という項目2番で、「ネットひろば」の開設が提言されています。「2020教区

シノドス(代表者会議)」の5つの柱の分科会(宣教、平和、多文化、協働、養成)で、それぞれ要約されたチャレンジを具体化して行くためのオンラインによる自主的な会合です。

この中で、広島教区においては、「宣教ひろば」の実施を最優先の課題として、昨年度からネットを活用しながら「宣教ひろば」を開催しました。第1回目が2024年4月29日に、「世界シノドス(第16回通常総会)」についての講演」と「霊における会話の学びと実践」をテーマに教区レベルで開催されました。また第2回目が2025年2月23日に、「近隣の小教区がともに歩む新たな姿(協働体)」とはというテーマに、協働体レベルで開催されました。そして、2025年6月の教区宣教司牧評議会において、今後毎年2月23日(国祭日)に、この「宣教ひろば」を開催することを決定し、次回2026年2月23日には、地区レベルでの「宣教ひろば」の開催が、現在

準備されているところで

この「宣教ひろば」は、教区における宣教活動の活性化を目指して開催されますが、この「宣教ひろば」は、意思決定のための参与機関(教区の司祭評議会、宣教司牧評議会、経済問題評議会)のような評議を目的とした会議ではないことを確認したいと思います。むしろ、教区宣教司牧評議会から依頼されたテーマについて、何が神の望みであるのかを識別するために、ともに学び、祈りのうちに聞き合い、分かち合い、そこで出された意見をまとめて提出する役割をもっています。そのまとめ(要約)は、(小教区、地区、教区レベルでの)参与機関に還元されて、意思決定のために役立てていただくこととなります。つまり毎年、開催される「宣教ひろば」は、幅広く共同で識別するために、神の民全体からの聞き取り、分かち合い、その要約を還元して、宣教司牧評議会を補助するシノドス的な活動であるというこ

とです。現在、司牧責任者(小教区主任、地区長、教区長)の識別・決定を補助するために(小教区、地区、教区レベルでの)宣教司牧評議会には、選出された代表委員だけが評議に参加します。しかし「宣教ひろば」では、どんな人にも自由に開かれた参加ができるよう、「ひろば」という名称が選ばれていました。また、「司教教書」(2022年復活祭)のパンフレットの7頁の「提言推進のための教区組織」という項目3番では、「次回の『教区シノドス』までの適切な中間期に、「ネットひろば」の拡大会議となる『教区ひろば』の開催をすることが宣言されています。「シノドス 実施ステージの旅路2025年―2028年」の文書の中でも、「デジタル・シノドス」が推奨されています。

③「霊における会話」の実践
「シノドス 実施ステージの旅路2025年―2028年」の文書は、「教会には、多様性に富ん

だ識別の手法と確立された方法論がある」(『シノドス最終文書』86項)ことを認識しながらも、今回の「世界シノドス」の特徴要素で、その成功要因でもある『霊における会話』が評価されるべきである」と述べています。「ただしそれは、唯一のシノドス的方法というわけではなく、何よりも教会的識別と同義語なわけでもなく、教会的識別のための一つのツールや準備として機能するもの」(4―1参照)

という理解が必要であることも付け加えられています。

広島教区においては、これまで2回の「宣教ひろば」において、「霊における会話」の手法が用いられました。そのために、「シノドス対応調整チーム」の提案で、ファシリテーターの研修会も開催されました。その後、十分とは言えないにしても、小教区や種々の活動グループにおいても自主的に「霊における会話」の実践がなされてきたようです。これから1年

に1回、実施されて行く「宣教ひろば」において、「霊における会話」のあり方を学び、その実践が親しみやすいものとなっていくよう、その手法の工夫やファシリテーターの養成にも力を注いでいくことが重要です。ただし、今後の「宣教ひろば」において、毎回、「霊における会話」を手法として用いる必要はありません。



平和行事2025報告

「2025 平和行事」を終えて

今年は被爆80年の節目にあたり、『原爆投下80年平和への希望をあらたに』核廃絶をわたしたちはあきらめない』というテーマで平和行事を開催した。米国の枢機卿と大司教をはじめとするカトリック大学の方たちからなる平和巡礼団、韓国の司教有志、日本の多くの司教など教区内外から、多くの方々に参加していただいた。5日の午後

「ともに歩むあたたかさのある教会」を目指して

広島教区では、2021年～2022年度にオンラインで実施された「2020教区シノドス」の提言のまとめである「司教教書」（2022年・復活祭）に基づき、宣教に励む教区へと成長していくために、昨年度（2024年度）から、「ともに歩むあ

たたかさの教会をめざそう」を長期目標として、新たな歩みをスタートしたばかりです。そこに「世界シノドス」（第16回通常総会）の新しい光が注がれました。「主イエスが弟子たちに託した宣教を、シノドス流の教会として前進させる」というわたしたちの教区における取り組みを具体的な形にしていくなかで、来年度から、ロザリオの月にあ

最初に、隣接するエリザベト音楽大学のセシリアホールをお借りして日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）と広島被爆者7団体、またANT-Hiroshimaの理事長の渡部朋子さんのご協力をいただき、米韓日の司教有志と被爆者団体との平和集会を開いた。この集会では、日本被団協のノーベル平和賞受賞をお祝いし、米韓日の司教様方と被爆者の方たちが平和への熱い思いを込めてメッセージを話された。集会の最後

には共同声明を発信した。続いて世界平和記念聖堂に移動して平和祈願ミサが行われた。米国とポルトガルの大使が参列されたことから、入堂時に信徒全員持ち物検査が行われるなど、厳しいセキュリティチェックがあった。ミサは菊地枢機卿の説教で、ミサの終わりに駐日バチカン大使の挨拶があり、レオ14世教皇様からもメッセージをいただいた。ミサの後、平和公園の原爆供養塔前で聖公会に加えて福音ルーテル教会も参

たり、聖母マリアの取り次ぎを願いながら、今後とも、教区のすべての兄弟姉妹の皆様のお祈りとご協力を、よろしくお願いいたします。



エリザベト音大で行われた平和行事

加しての合同祈りの集いが行われた。

翌日6日の原爆の日の朝8時、パイプオルガン演奏と沈黙に続いて『原爆と全ての戦争犠牲者のためのミサ』が行われた。ミサの前にはノートルダム清心高校の生徒たちによって聖堂案内が行われた。続いて行われた青年の企画によるカトリックユースプログラムには、信徒の子供たちやカトリック学校の生徒たち



エリザベト音大で行われた平和行事参加者

107名ほどが参加し、松浦司教様のお話に続いて分かち合いを行った。午後からは、ルーテル教会で『8・6キリスト者平和の祈り』集会が行われた。夕方からは、大聖堂で20回目となるレクイエムコンサートが行われた。また関連行事として、午後から音大では、日米カトリック大学による平和に関する学術シンポジウムが行われ、続いて広島県宗教連盟主催の「平和の意志（石）をつなぐ」出発式が執り行われ、記念聖堂前から平和の石を先頭に原爆ドームの先の法縁寺まで行進した。

うちの イチ押し!

Vol.2 呉教会

うちの教会は、昨年献堂70周年を迎えました。

70年前の呉は戦争の大きな痛手のために、復興もまだ緒につかず、衣食住にも事欠く状態だったそうです。そんな中、建てられた新聖堂を「人間の努力より、聖母マリア様の御取次と、神の御摂理の不思議なご協力で建てられたものであることを感謝しましょう」と当時の主任司祭ベトロ・



呉教会の信徒

コップ神父はおっしゃいました。

それから神父様方や多くの信徒の方々の祈りと奉仕で守られてきた聖堂ですが、ここ数年は

次々と修繕が続く、ついに大がかりな外壁塗装が必要と判断されました。高齢化の今、多大な工事費が本当に集められるのか、不安も残しつつ始まった工事です。多文化共生でしたが、多文化共生とともに歩む外国籍の方々の協力もあり、献金は間もなく目標額に達するところです。

復活祭前日に足場を取り払われ、生まれ変わった純白の聖堂がその姿を現しました。主の復活と重なり、いつも以上に大きな喜びとなった復活祭でした。

聖堂内部は昔な



呉教会

がらの木の長いですが並び、美しいステンドグラスを通して差し込む光に歴史を感じ、心癒されます。献堂当時8枚だったステンドグラスは、2年前新たに7枚加わり、イエスのご生涯を表すことができました。それは「聖堂のすべての窓をステンドグラスに」とのコップ神父の念願であり、このステンドグラスを通して、呉市民の救いのためにキリストを伝えていくとしていた神父の熱意と使命を私たちは受け継いでいきたいと感じています。

風呂井・諫山

(呉教会)

ベトナム共同体から報告



広島教区ベトナム共同体の信仰生活と若者の司牧活動に

ご理解とご支援、ご協力に心から感謝申し上げます。



この度、巡礼支援金（総額 30 万）を頂き補助として使わせて頂きました。

現在まで、広島共同体は 7/19・20、呉共同体は 8/15、福山共同体は 8/24、128 名が

広島教区内巡礼地教会を訪問し祈りと交流・分ち合いを通じて信仰を深めました。

全国ベトナム人若者の為の聖地巡礼 9/14～15（神奈川）に、山口・広島・岡山のベトナム青年 23 名が参加。今後、三篠共同体が長崎巡礼 10/11～12（約 40 名）広島・三篠・三原共同体が

細江教会・サビエル・津和野・乙女峠の巡礼 11/2-3（約 40 名）を計画しています。

このように、教区からの暖かいご支援により、各共同体は信仰を深め、特に若者たちが主との出会いを体験し、共同体としての絆を強める貴重な機会を頂きました。

私達ベトナム共同体と若者は、広島教区の為に、ささやかな力と祈りを捧げ続けてまいります。

ベトナム人の宣教司牧担当司祭 テェ



名古屋教区から献金の御礼

広島教区は、能登半島の復興支援のための2回目の募金1,265,662円を8月29日に名古屋教区にお送りしました。1回目と合わせると合計6,980,129円です。ご協力ありがとうございました。名古屋教区 松浦悟郎司教様から、お礼と能登半島地震で全壊した輪島教会献堂式のお知らせがありました。(以下に一部抜粋)

……輪島の信徒たちのほとんどは被災し、仮設住宅に避難するなど大きな被害を受けましたが、全国から名古屋教区に寄せられた義援金で生活支援が受けられ、また、輪島教会が新しくできることで、生活と信仰の大きな支えになると思います。

能登半島地震に際しては、日本司教団で取り決めたERST(緊急対応支援チーム)とカリタスジャパンの支援によって、被災地全体への支援の計画ができ、教区としての活動の方向性を決めることができました。またそれぞれの司教様方の応援もあって、全国の教会や修道会、またカトリック学校、施設、個人から本当に多くの義援金を送ってくださり、輪島教会が建てられるところまでできました。心から感謝いたします。どうぞ、教区のみなさまによりしくお伝えください。……



新しくなった輪島教会



エリザベト音楽大学合唱団 イタリア・ドイツ公演



7月30日から8月8日まで、エリザベト音楽大学合唱団が「被爆80年イタリア・ドイツ公演」を行いました。声楽専攻生を中心とした44人が広島市の「平和芸術団」として派遣され、イタリアのローマ、ベネチア、ドイツのハノーバーの各地で演奏しました。

7月31日、ローマのジェズ教会で行われた聖イグナチオ・デ・ロヨラの記念日のミサでは、奉納と聖体拝領時に聖歌隊として演奏奉仕しました。翌8月1日は聖イグナチオ・デ・ロヨラ教会で演奏会を開催し、今回新たに本学教員が作詞・作曲した、広島で被爆者救援に尽くしたペドロ・アルペ神父の列聖を祈念する合唱曲《「他者のために」ペドロ・アルペ神父を偲んで》をはじめ、約1時間のプログラムを披露しました。8月2日には聖年を祝うサン・ピエトロ大聖堂を訪れ、全員で祈りを唱えながら聖なる扉をくぐり、聖堂内を見学しました。午後からはイエズス会本部にてアルトゥーロ・ソーサ総長と面会。総長への音楽のプレゼントとして、聖年公式聖歌「希望の巡礼者」をイタリア語と日本語で歌いました。

8月4日にはベネチアで演奏会、8月6日には広島市の姉妹都市であるハノーバーで広島原爆犠牲者追悼式典に参列したほか、現地の合唱団との合同演奏会も開催しました。



聖イグナチオ・デ・ロヨラ教会にて

昨年より、山口教会を会場に開催させていただいている「Xavier Fiesta（以下、サビフェス）」は、皆さまの寛大な寛容なご協力と、お祈りのおかげで、地域の方々、さらには他教区の方にも喜んでいただけるイベントになってきております。この場をお借りしまして、改めて感謝申し上げます。

そんなサビフェスのこと、「皆さまにもっと知っていただいたら良いのでは？」とご提案をいただき、本記事を書かせていただきました。

「教会オープンデー」を合言葉に、開催させていただいているこの一日の様子を、すこしご紹介させていただきます。



この日は、教会オープンデー！

「ともに歩む教会」の実現を目指して



来場者と談笑するボランティアスタッフの様子

信者・未信者、宗教に関心のない人を問わず、「ともに歩む教会」を実現するための開かれた福音宣教の試みとして、サビフェス開催への動きが始まったのは、2023年の夏のことでした。

そのきっかけとなったのは、WYD リスボン大会に参加した青年たちが目にした光景です。世界中の教会から集まった多くの人々が、キリストという名のもとに一つとなって喜びを分かち合う姿に触れ、日本でも「この喜びを共にしたい」と願いが生まれました。

その願いを受けて、少しずつ具体的なかたちを探る歩みが始まりました。今年はさらに聖年ローマ巡礼を経て、新たに励まされた青年たちの思いも加わり、サビフェスはますます力強い広がりを見せています。

教会に育まれた心が、花ひらく一日

第1回サビフェス開催のときから、「サビフェスは、スタッフが凄い！」というお声を、多くの出展者さんよりいただいています。普段、様々なイベントに出展されていて、私たちよりはるかにイベントのご経験がある方々からいただくそのお言葉はスタッフたちの励みにもなっています。どうして、そう言っていただけなのか。それは、スタッフ一人ひとりがそれぞれに教会を大切な場所に感じている、そして、そこを訪れる方にもすてきな教会体験を持って帰っていただきたいという思いを、心のどこかに持っているからではないでしょうか。教会で受けた愛が、教会を訪れる方への最高のホスピタリティとなって、花ひらいています。



出展者さんの荷物を運ぶスタッフたち



サビフェス vol.2
ボランティアスタッフ集合写真



イベント終了後の様子



テゼの祈り

ステンドグラスから差し込む光と、皆の歌声で紡ぐ聖歌によって、会場が祈りの空気に包まれる時間です。過去2回のサビフェスでは、プログラムの一番最後に実施することで、これまでカトリックの祈りを体験したことのない出展者さんたちにもご参加いただき、教会のエッセンスに触れていただく時間となっていました。今回は、来場してくださる方にもご参加いただきやすい、14:00~のプログラムとなっています。



臨時駐車場など
イベント詳細は
公式SNSより
ご確認ください



INSTAGRAM

サビフェス vol.3
@山口教会

11/3 mon.

Marché

11:00~15:00

Taizé

14:00~14:30



オススメ
オリーブの樹

秋のおうち時間を楽しもう



聖書ぬりえ

ぬりえは子ども用？
いえいえ、どなたにでも！
文字を追いつける、いつもの聖書時間とは、ちょっと違う方法を試してみませんか。
聖書の時代の色や情景を想像しながら、色を重ねる楽しさをどうぞ。
ついつい時間を忘れてしまう、かも？！



みことば花みくじ

陶器のマリアさまや天使の中に入っている「みことば」が書かれたおみくじ。このおみくじをそのまま土に埋めて、水やりをしながら待っていると…。
あら、不思議！
小さな芽が出て花が咲くとか！
みことばを味わいながら、どんな花が咲くのか楽しみに待ちましょう！



サンキャッチャー

一瞬にして「その雰囲気」になると評判のステンドグラス風シール。貼って剥がせるので、リビングでも、寝室でも…、どこでもお好きな場所に！お日さまの恵みをより楽しめます。

お見舞いにも
「ベッドの上からでもマリア様が見える！」と好評です。

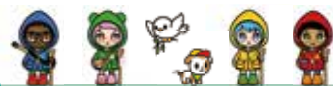


初めてのクリスマス

いつも荷物が届くたびに感じているプレッシャーも、クリスマス用か？と思うだけでちょっぴりワクワク★荷ほどきのたびに「わー素敵！」「なんだこりゃ？」を繰り返しています。自分だけのお気に入りを見つけてください！



続々入荷中！



まもなく閉年



2025 聖年もまもなく閉年。
「希望の巡礼者」として過ごしてきた私たちに寄り添い、ともに歩んできたロゴマーク。期間限定グッズの伴走も残りあとわずかです！



おもちゃオリーブの樹

こんにちは。「職町書院 オリーブの樹」の日曜日担当ボランティアの「サラーム」(パレスチナの女性を支援する会)です。私たちは、パレスチナの紛争が長く続く中、イエスさまのふるさとベツレヘムの数10km南西部にあるイドナ村(ヨルダン川西岸地区)の女性たちが制作した刺繍製品のフェアトレードを通して、彼女たちの自立支援を行っています。日頃より、カトリック職町教会には、研修室利用やバザーでお世話になっており、ありがとうございます。サラームの活動を30年近く行いながらも、常設展示場所がなく、教会以外に、国際交流イベントや教会関係のバザーなどを行ってきたところ、この度、サンパウロ運営の「職町書院オリーブの樹」で常設させていただく貴重な機会をいただきました。

実際は、商品のバーコード作成、ディスプレイの方法、レジの打ち方、対応の仕方など、てんやわんやの数ヶ月ですが、平均年齢60歳以上の熟女たちの奮闘を、皆様、どうぞ温かい目で見てくださいませ。広島市内外の教会に属している信者を含め、メンバー10数名で毎日曜日を担当する中で、長く存続していた「パウロ書院」への感謝の気持ちを忘れずに、美しく仕上げられた現地の製品を手にしただけの喜び、教会関係の書籍・各地修道院のグッズに囲まれる幸せを感じています。

最後に、サラーム製品のご紹介を…パレスチナ刺繍(クロスステッチ)をあしらった色鮮やかなバッグ・ポーチ・聖書カバーなどを取り揃えています。合わせて、ベツレヘムの工房で造られたオリーブ工芸品やベツレヘムパールなども置いてあります。パレスチナの平和を祈りながら、これからも皆様のご協力をお願いいたします。

サラーム代表
観音町教会信徒
神垣しおり



地区便り

広島地区

*2025 聖年 英隆 一朗
神父黙想会



廿日市教会 黙想会の様子

2025 聖年の西広島協働体企画として、英隆 一朗神父様を招いての黙想会を廿日市教会で行いました。テーマは「希望の巡礼者」。当日は西広島協働体4教会からの79名を含め100名の参加がありました。改めて「聖年」についてその起源からお話し下さり、巡礼、免償との関係がよく分かりました。「ゆるしは神の純粋なおめぐみ、償いは人間が果たすべきこと」「ザビエルは言葉も習慣も通じない日本に來た

時、神に頼るしかない、本当の謙遜を知ったと手紙に残している」「神の恵みに対する感謝としてこの苦しみを捧げられることが希望になる」などポイントごとに具体的な例、聖書の箇所を引用してのお話でした。締めめの聖歌「希望の巡礼者」に英神父様も手話で加わって下さりさらに印象に残る黙想会となりました。高井吉支子(廿日市教会)

*広島中央協働体で長崎巡礼しました

聖年助成金を利用して広島中央協働体(幟町、東広島、翠町、呉、向原)に広島地区の尾道、観音町の信徒を加えて25人で長崎平和行事への参加と佐世保・長崎の教会を巡る2泊3日の巡礼をしました。

初日の8月9日は長崎原爆の日で、佐世保の相浦と三浦町の2教会を巡って長崎市に向かい、浦上天主堂での平和祈願ミサに参列しました。ミサ後には、被爆マリア像神輿を先頭に爆心地公園まで松明行列しました。

2日目は日曜で、大浦教

会での主日ミサの後、長崎市内の教会を巡りました。午前中は中町教会、続いて聖母の騎士修道院でコルベ神父の展示を見て、ルルドの水をいただきました。昼食と自由時間の後、山にある三ツ山教会を経由して、西町教会と城山教会を訪れました。城山教会は2008年の列福式の時、レオ14世教皇さまが訪問された教会です。

3日目は大雨のため予定を変更し、海外の出津教会でミサをささげ、信徒の方からドロ神父に始まるこの地の再宣教の歴史を伺いました。

新幹線が昼過ぎまで動かず心配しましたが、再開し予定より少し遅れて無事広島に帰着しました。

栗栖 徹(幟町教会)



長崎巡礼の参加者 浦上教会

77 海峡からの風

下関労働教育センターだより

長崎・浦上天主堂の双塔の鐘、アンジェラスの鐘は被爆倒壊し、片方だけは原型を留めた状態で掘り起こす事ができましたが、もう一方は壊れて原爆資料館に展示されています。再建された浦上天主堂には片方だけ鐘が設置され、以後片方は無いままでした。

2年前に浦上に調査で訪れたアメリカの研究者が何か浦上のためにできる事は無いのか?との問いに被爆二世の男性がこのエピソードを伝えました。これをきっかけに研究者はアメリカの人々に呼びかけ、新たなアンジェラスの鐘を今年寄贈。8月9日に両方の鐘の音が80年ぶりに同時に響きました。

その前日、このエピソードをキッズゲルニカとしてゲルニカと同じサイズの布に子どもたちと一緒に描くプロジェクトが長崎大学のキャンパスで学生団体の主催で行われました。平和×アートそしてアフリカ×長崎と言うテーマのイベントで、主催のサークル「ししこのプロジェクト」とは長崎でのケニア関連のイベントで協働していました。そ

のサークルの呼びかけに添えて、昨年広島でも開催したMy Dream絵画展をブース出展して来た訳です。



キッズゲルニカ

短時間の展示でしたが、貧困、孤児、身体的・性的暴行など厳しい環境を乗り越えて、共に学び、給食を共にし、愛される環境に身を置くことができたケニア・スラムに住む子どもたちの描く「夢」はとてつもなく明るく、希望に満ち溢れた絵で、多くの人々が足を止め、見てくれました。

そして、40年ぶりの長崎の平和式典、アンジェラスの鐘の音を聞きに行くつもりでしたが、朝から大雨で断念しました。実際九州は大雨災害に見舞われたので、この判断は間違ってたかとは思いますが、心残りです。いつかリベンジしたいですし、絵を持つていろんな場所に行きたいですね。(天城 研司)

岡山鳥取地区

* 広島教区の日開催

9月15日(月・祝)岡山教会を会場に広島教区の日が開催されました。今年は、岡山鳥取地区の担当です。当日の参加者は、約300名でした。

白浜司教様をお迎えし、プログラムは、12時開会。参加者全員で、『希望の巡礼者』を合唱し始まりました。続いて、『広島教区百年史』が刊行されたことをテーマに講演会がありました。講師は、広島教区百年史編纂委員会の方々です。川本隆史委員長・猪口大記神父・肥塚倅司神父の3人が話されました。本の内容や見どころなどお話しされたのは、猪口大記神父です。講演会終了後、参加者から大きな拍手が起りました。そして、白浜司教様からの感謝の言葉があり記念品の授与が行われました。続く国際ミサでは、第一朗読は、ベトナム語で、共同祈願は、日本語・英語・ベトナム語でおこな

われました。聖歌は、日本語・英語・ポルトガル語・スペイン語・ベトナム語の歌がありました。ミサの閉祭前に、プラチナ・ダイヤモンド祝のシスター3人の紹介と、司教様からのカードの授与があり、記念撮影の後、閉祭の歌が聖堂内に響き渡りました。

今回は、同時開催として、『広島教区百年史』の販売があり、100冊用意していましたが、88冊が、売れました。(1冊約1980円です。)また、チャリティー参加団体6団体が支援先の紹介や物品の販売をしました。

岡山教会の建物の中も外も賑やかな雰囲気になっていました。

さて、行事の最後に、祝賀会を行いました。9周年を迎えた司教様と3人のシスターを中心に沢山の人が集まりました。ケーキカットがあり、ベトナムやフィリピンの方々の歌と踊り聖歌隊による歌で盛り上げました。最後の白浜司教様のお祈りの時まで、多くの方が残っておられたのが

印象的でした。

開催のために岡山教会の皆様を始め多くの方のご協力と沢山のご寄付をいただきました。この場をお借りしてお礼申し上げます。また、YouTube配信のため、広島から来られたお2人には、聖堂の2階からの作業お世話になりました。当日の様子は、広島司教区ホームページの動画コーナーでご覧いただけます。来年は、広島地区の担当です。よろしく願いします。



岡山教会で行われた「広島教区の日」のミサ

今年は教会にとって特別な聖年を迎え、3つの教会を巡る巡礼の旅にできました。その旅は主任神父様がご自分の車に私達5人を乗せてくださり、遠い道のりを長時間運転してくださいました。そのお心に感謝の気持ちでいっぱいになりながら乗っていると、教会を出発して、まもなく、空に大きな虹がかかり、神さまが私達を祝福してください、と嬉しく

山口鳥根地区

* 聖年巡礼の手記

2025年9月5日



巡礼参加者

なりました。初めに、幟町教会のマリア小聖堂で、皆でミサの準備をしてミサをお捧げし、免償の恵みと巡礼の無事を祈りました。そ

して次に、岡山教会では、ロザリオ一環を神父様と共に唱えました。そして、翌日は米子教会に向かい、祈りのうちに神の愛を深く思い起こしました。ミサの最後には、「神が御顔の輝きで私達を照らし、恵みで満たしてくださいます様に。そして、徳山教会、下松教会、すべての教会の人々の上に、父と子の聖霊の祝福がいつもありますように」という祈りと共に、聖年の祈りを唱えました。

今回の巡礼は免償の恵みと共に、信者同志の絆を深め、神さまの愛の大きさを心に刻む旅となりました。心より感謝

明石由美子(徳山教会)

青少年の活動

今回私はローマで開催されていたジュビリーに行っていました。広島教区からは3人の青年が参加し、全国の教区から50人ほどの青年が集まりました。出発の三ヶ月程前から月に一度くらいオンラインで講話を聞き、分かち合いをして事前準備もしていきま



聖カルロ・アクティス

日本の教会に若々しい光を

細江教会 デイン 神父（イエズス会）

2025年9月7日、教会は聖カルロ・アクティス（ロンドン1991―2006アジジ）を聖人の列に加えることを喜びのうちに迎えました。デジタルの現代において、聖カルロは15歳で神への深い信仰心を持っていました。

日本の殉教者や隠れキリシタンの出来事を思い起こす時、私たち日本人は信仰を「守る」だけでなく、「生きる」ことが血肉の一部となつていきます。現代では信者数が減少し、多くのカトリック施設が閉鎖され、司祭も不足していますが、その種は今も確かに残っています——毎朝ロザリオを唱える

した。そして迎えた日本出国の日はずごく緊張していたのを覚えています。言葉が通じず不安でし、最も不安だったのはトイレと治安！でした。しかし、ローマについたら町の人はみんな陽気で優しく不安はすぐになくなったのを覚えています。ちなみにローマのトイレはすぐきれいでした。そうして始

まったジュビリーの巡礼はすごく「楽しい」経験だったことは今でも記憶にすつごく残っています。日本の巡礼団のみんなと夜遅くまで交流を深めたり、イタリア人と歌ったり、フランス人と歌っていたら巡礼団とはぐれたり、ポーランド人と町中で輪になつて踊ったり、韓国の神父様に韓国人と間違えて「こつ

Sの投稿一つを通して広がつていくことを示してくれます。

したがって、日本の教会は、カルロから、デジタルコンテンツの制作やオンライン祈り会の開催、またはInstagramでのみ言葉を分かち合うといったように、テクノロジーを用いて福音の種を蒔く方法を学ぶことができるでしょう。

カルロは、インターネットがただの娯楽の場ではなく、「天国への道」となりうることを証明しました。

次には、裕福な家庭に生まれながらも、カルロはとても質素に生きました。物質的なものにとらわれず、聖体を生活の中心に据えていました。彼は「聖体は私を天国へ導く高速道路です」と語り、「もし私たちが何時間も太陽の前に立っていれば肌が黒くなるでしょう。しかし、イエス・キリストの聖体の前に立てば、聖なる者となるのです」とも言っています。カルロは毎日ミサに与り、聖体礼拝をし、ロザリオの祈りを大

ちにこい」と連れて行かれたり、どれもすごく楽しい体験でした。もちろん、巡礼の道のりは非常に大変でキツいなと何度も思いました。しかし、それ以上に25年に一度の祭典を楽しむことが出来たように思います。そして、ジュビリーの中で私は信仰という非常に大きなものに触れることが出来たと感じています。

切にしました。「ロザリオは天国へ行く一番の近道です」とも述べています。

それで、忙しい日本社会では、典礼から遠ざかりがちですが、カルロは私たちが命の源泉に立ち返るよう招いているのです。聖体礼拝を定期的に開催することは、イエス・キリストの現存への愛を再び呼び覚ます一つの方法となるでしょう。また、信仰が重荷ではなく、命と光そのものであることを感じる必要があります。

つまり、聖カルロ・アクティスは、決して遠い聖人ではなく、私たち、そして現代の若者の良き友なのです。彼は私たちに特別なことを求めるのではなく、日常を「非日常的」に——愛と信頼、そして神の臨在をもって生きること——を招いています。日本の教会にとって、カルロは希望の種であり、若々しい光であり、聖性には文化や年齢の壁がないことを思い起こさせてくれる存在ではないかと思ひます。

2025 聖年の閉幕まで約2か月。聖年の恵みに感謝し、被爆80年でもあった節目の1年を振り返りながら、これからの希望の中を歩んでいきたいと思う。



巡礼団

す。初めましての人だらけの日本巡礼団や、各国からの巡礼者、みんなお互いについて深く知らないけど、何か通じ合っているものがある。ミサや祈りの言葉が理解できなくても何かが伝わってくる。これが信仰なのかなと思います。私は今年で20歳になりましたが、ローマで初めて信仰をしっかりと意識することができました。最初はドキドキから始まったジュビリーでしたが、最後は楽しさと信仰にあふれた最高のジュビリーになりました。

小藪優太（岡山教会）